「減災のための長野市りんご農家応援PJ」

勝浦ゼミナールⅠ・Ⅱ
城西大学経済学部4年倉嶋祐弥

活動内容

私たちが現地に出向いて直接農家の方を支援。
2021年10月、2022年10月。毎年1回、繁忙期に1泊2日で実施。

きっかけ

2019年の台風19号で、長野市のりんご農家が大きな被害を受けたことがゼミで話題になった。その際、「台風が来るのは3～4日前にわかるのだから、一気に収穫すればいいのに…」という声があがった。その声に対して長野県出身のAくんが「りんご農家の多くは中山間地域や過疎地域。りんご畑を管理しているのは高齢者ばかりである。りんごの木に登ったり、脚立を使ったりと大変な仕事ばかり。りんごは結構重いんだよ。一気に収穫なんて人手が足りず、できないのが実情」と発言。
そこで私たちは「じゃあ、いっそうの事、ゼミで収穫のお手伝いができないかな～」との提案が誰ともなくあったのがきっかけで、Aくんが知り合いのりんご農家をゼミと繋いでくれたのがきっかけでした。

2019年台風19号の被害

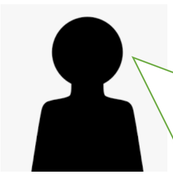
コンセプト

・繁忙期の人手不足の解消。
・被害に遭う前に収穫を終えることで農業被害の軽減。

活動報告

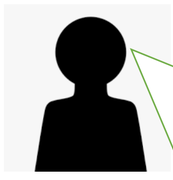
2021年の活動の様子

参加者からの声



りんごを扱うのが繊細で大変だったけどやりがいがあり楽しかった。14人で参加しても大変だったので普段の農家の方々の大変さが実感できた。

農家の方の大変さを実感。

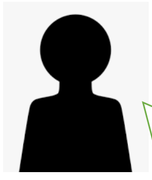


とても貴重な体験ができました。
暑い中でのりんご狩りでした。気温の変化だけでなく、台風などの自然災害と闘いながらもりんご、野菜を毎年育ててくださる農家さんには感謝しかありません。

食材を育ててくれた農家の方に感謝。

2022年度の活動の様子

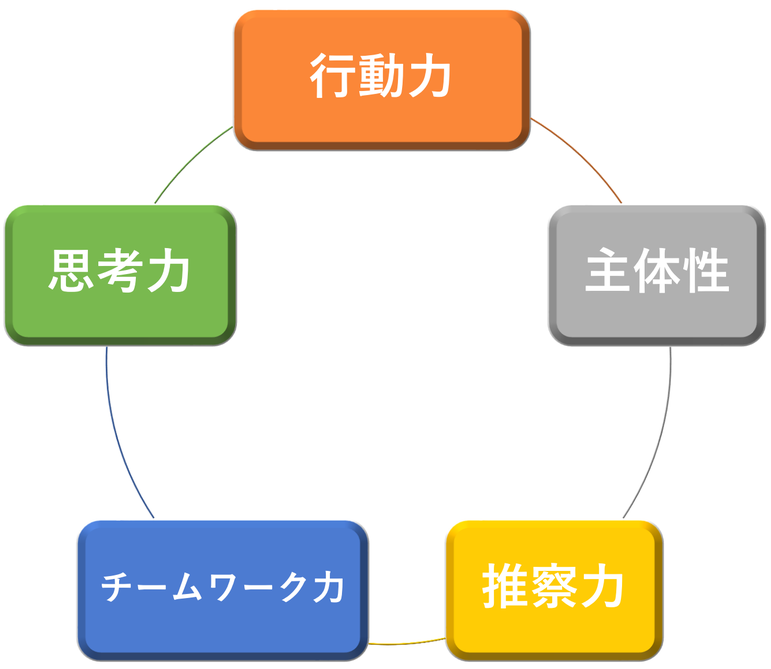
普段、当たり前のようにスーパーに並んでいると思っていた野菜や果物でしたが、今回、りんごの収穫を体験して、有難みを実感しました。2日間、けが人0で終われましたが、農家の方は年齢を重ねていく毎に怪我のリスクが上がる中、「いつも美味しい野菜や果物をありがとうございます。」と感謝を伝えたいです。



初めてりんごの収穫のお手伝いをして、表面的な思いではなく深く、生産者さんへの感謝の気持ちが湧きました。今までの人生で体験してきた食材の出発点は「スーパー」「小さなプランターで育てた自家栽培の野菜」でした。頭では生産者さんが丹精込めて育てた野菜だと分かっていても、想像だけに終わり深い実感はありませんでした。しかし、実際に「自分の目」でリンゴの木を見て「自分の足」で農園に入って、「自分の手」でりんごを箱に詰めてみて其々感動したのを覚えています。

当たり前 → 感謝　　五感で感じたからこそ、終始感動。

活動を終えて・・・

この活動により、「行動力」「主体性」「推察力」「チームワーク力」「思考力」が大きく成長した。どういう大変さがあるのか、今自分にできることは何があるのかを考え、仲間と協力することによって社会人基礎力の向上につながったと感じる。例えば、リンゴがなっているところを始めてみるゼミ生がほとんどだった。そのため、初めはどのりんごをとって、どのりんごをとらないといった色ずきの判断がわからず、自分では決められなかったが、2日目はひとりひとり黙々とりんごとりに励む姿があった。また、各々が脚立をどう掛ければよいかなど思考錯誤する機会が多かった。そして、りんごをとる人ととったりんごを受け取る人で2人1組になり、協力し合う姿も見られた。活動を通して、ひとりひとりが達成感、充実感を感じられ、大変有意義な時間を過ごせた。

最後に、参加者の多くから「感謝」の声が多かった。普段、私たちが当たり前だと思って食べている食材の背景には汗水流しながら一生懸命育ててくださった農家さんの丹精が込められていることを身をもって実感できる活動であった。